

# 世界の社会的課題 どう向き合う

## 京都でG20諸宗教フォーラム

格差や貧困の拡大、生命科学の発展に伴って起きる問題など現代社会が向き合う課題について宗教者が語り合う「G20諸宗教フォーラム2019京都」が、6月11〜12日に京都市下京区のキャンパスプラザ京都などで開かれた。分科会は人工知能(AI)や気候変動など八つのテーマであり、参加者約120人が意見を交わした。

「抑圧された人々と共に生きる」ではイスラム教徒で中国新疆ウイグル自治区ウルムチ出身の徳島大学院生サウティ・メメティさんが報告に立ち、「ウイグルのイスラム教徒は9・11以降はテロリストのレッテルを貼られ、習近平指導部発足後は監視がより厳しくなっている」と母国の状況を訴えた。

チベット問題に取り組む東京の僧侶小林秀英さんは「中国からの弾圧



社会的な課題に対して宗教者の向き合い方を話し合った諸宗教フォーラムの分科会  
(京都市下京区・キャンパスプラザ京都)

## 人権宣言重視 各国協調を ■ 命軽視の考え方に警鐘

に対し、昨年末までに164人が焼身抗議と呼ばれる行動で命を落としたと報告。こうした内容を受け「国連憲章や世界人権宣言にのっとった行動が重視されるよう、G20の参加各国の協調を求めていくことが宗教界の果たせる役割ではないか」との意見で一致した。

「少子高齢化問題」では日本ムスリム協会の前野直樹理事が登壇し、「5人目の子が生まれた時、ムスリムの友人からは『おめでとう』と祝福されたのに対し、日本人からは『大変だね』と言われた」と意識の違いを紹介。その上、「ムスリムには『種は唯一の神より来たるもの』という意識が根付いている。このためイスラム社会は少子化とは無縁」と指摘した。宗教団体として少子高齢社会にどう向き合うかの議論もあり、複数の登壇者が「人生の悩みを考えるような時には宗教的な教えが大切だし、コミュニティ作りなどは社会活動と捉えて教えを抑えるなど、さまざまな向き合い方ができるはずだ」と話した。

妊婦の血液でダウン症の有無など胎児の染色体異常を調べる「出生前診断」への言及があった「生命科学と宗教」。堺市の観音院住職の大西龍心さんは「以前は命は宗教者の役割だったが、科学の発展が命の根幹に関わるどころへ及んできた。(胎児の)命を奪ってしまったと両親の心こそ宗教者は見つめないといけない」と述べた。金光教泉尾教会(大阪府)総長の三宅善信さんは「できるかできないかは科学技術の問題だが、するかしらないかは本人の選択の問題」とした上で、命を処分可能な所有物と考える見方に警鐘を鳴らした。

(太田敦子、森敏之)